

試験研究評価シート（事後）

評価の種類	事後評価	担当名	水質環境担当
課題名 (研究テーマ)	徳島県沿岸における有機物及び窒素化合物の生分解性調査	研究者名	(正) 出羽 知佳 (副) 工内 輝実
研究期間	令和2～4年度	研究に 要した時間 (概数)	令和2年度：96日 令和3年度：48日 令和4年度：36日
予算額 (千円)	令和2年度：500 令和3年度：505 令和4年度：505	予算種類	国補 ・ 県単
必要性	<p>瀬戸内海の水環境については、瀬戸内海環境保全特別措置法の改正や瀬戸内海の環境の保全に関する徳島県計画の変更により「湾、灘その他海域ごと」のきめ細やかな水質管理が求められるようになった。</p> <p>これまでは、排水基準や総量規制基準など、濃度や量に対する規制が進められてきた。しかし、漁獲量減少やノリ・ワカメの色落ちが発生し、窒素化合物の一形態である溶存態無機窒素が注目されるなど、量的規制に加えて質的管理の視点が求められ始めている。</p> <p>質的管理に向けて、形態別に有機物や窒素化合物を把握する必要があるが、県沿岸海域において詳細な水質調査は行われていない。</p> <p>また、生分解試験により難分解性有機物・難分解性有機窒素や形態の変化について調査することは、有機物及び窒素化合物の変動についての評価に役立つとともに、海域ごとの特性を把握するため必要である。</p>		
目標	<p>瀬戸内海環境保全特別措置法及び瀬戸内海の環境の保全に関する徳島県計画にうたわれた、きめ細やかな水質管理を実現するため、従来の量的規制に加え質的管理も視野に入れた施策の基礎資料となる水質把握をめざす。</p>		
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 海域ごとの有機物及び窒素化合物の詳細な水質調査を実施する。 2 難分解性有機物及び難分解性窒素の実態を把握する。 3 有機物及び窒素化合物の各形態の変化を調査する。 		
手法	<ol style="list-style-type: none"> 1 海水の有機物、窒素化合物について分析し、形態別の濃度を算出する。 2 生分解試験を行い、形態別の有機物濃度、窒素化合物濃度を分析し、難分解性有機物濃度、難分解性有機窒素濃度を算出する。 3 生分解試験前後の測定結果を比較し、形態の変化について解析する。 		
成果	<p>県沿岸海域における有機物、窒素化合物の形態別濃度や難分解性有機物、難分解性有機窒素の現況を把握し、水質管理の推進につながる知見を得た。</p>		
追跡評価	<p>無（その理由：難分解性有機物及び難分解性有機窒素についての実態調査であるため）</p>		